●座談会

関先生と口承文芸研究

小澤俊夫（筑波大学）
直江広治（筑波大学名誉教授）
野村純一（國學院大学）
大林太良（司会・東京女子大学）

一、口承文芸研究における関敬吾

大林　関敬吾先生が口承文芸研究に大きな足跡を残してお亡くなりになりましたので、先生の足跡を偲んで先生の口承文芸研究における役割について、皆さん一緒にこれから座談会を持ちたいと思います。いろいろ取り上げる問題がありますけれども、まず「口承文芸研究における関敬吾」というそのものズバリの大きなテーマがあります。ことにその方面において柳田国男といったいどういう関係にあったのか、また柳田国男流の研究法とどういう違いがあったのか、どういう点が共通しているか、また関先生の活躍した時代というものがどういうふうに先生の研究に反映しているのかなどの点が考えられます。そのへんを野村さんから何か話して下さい。

野村　関先生とは物理的な長い時間のお付き合いがあったわけではありません。先生の晩年の十年程に限られています。お宅に伺って話をしたり議論するとその度に関敬吾という一人の研究者、特に昔話の研究者にとって柳田国男がいかに大きな存在であったか。関先生は昔話研究にあっては柳田を越えようという意志が頗る強かった。そのように思われました。

大林さん、小澤さんは先生の一月二十九日の葬儀、それからその前の通夜において下さったわけです。私は二十九日の葬儀が終わっ

たあと堀ノ内の葬儀場まで高木史人君と共に行って最後にお骨を拾いました。ここで初めて明かします。骨上げのときに骨を拾おうとしましたら、何と言うべきでしょう。大きな骨がほとんどないのです。愕然としました。先生は長らく結核をわずらっていらしたから、長年の薬の影響があるのか。それともご高齢であったがためにそうだったのかわかりません。しかしほとんど完全燃焼でした。灰になって出ていらした、という実感を目の前で持ちました。関敬吾という人は一人の研究者として九十一年、学者としての生涯を完全燃焼したのだ。そういう思いを強くしました。その意味では幸せでいらした。最後まで現役の研究者で全うされたという凄さを持っていらしたと思いました。

米寿を祝う会であいさつする関先生

実は今日、私はここに昭和十一年刊の『昔話採集手帖』を一冊持って来ました。見ていただくとわかりますように柳田国男・関敬吾共編になっています。それでいながらここではっきりと柳田国男は「昔話の分類ということはかなり大切なことだが、今はまだ定まった説はない。この手帖の順序は大体に私の分類案によったもので、それも決して最善のものと信じているわけではない云々」というわけで、この『昔話採集手帖』はあくまでも柳田国男の私案で、ご自分の分類案であるというのをきちんと書いてあるわけです。そして「一番」の桃太郎から「百番」の果てなし話に至るまで分類されている。この分類がやがて『日本昔話名彙』つまりは昭和二十三年三月一日の刊行に発展していく。したがって昭和十一年に柳田、関お二人の名前の『採集手帖』の分類は、柳田案が非常に強いと同時に、お二人の名前で出してある以上、これにはやはり関先生の意見も相当入っていただろうというように客観的に読み取るわけです。この柳田の『日本昔話名彙』は、誕生と奇瑞から始まって、不思議な成長、幸福な婚姻、継子の話とか財宝の発見、厄難克服、動物の援助でそして最後の知恵の働きで、人の一生を小さ子の誕生からずーっとこの一本の筋道でもって、つまりは本格昔話を通そうとしている。その一方で派生昔話という柳田国男独自の用語を使って、本格昔話と派生昔話という二つの概念を提出している。

それならば関先生はこの柳田案をどこまで承知していたのか。前々からその部分、お二人はかなりのディスカッションの後でこう

いう形を取ったのではないかと思っていたのです。しかしそうではないらしい。そこがよくわからなかった。それといいますのも、雑誌『昔話伝説研究』第三号、これは昭和四十八年三月に出ています。この雑誌には関先生が「単一型式と複合型式」という論題で巻頭論文を書かせてくれということで、原稿を頂戴いたしました。私が直接頂戴しました。関先生はこの出だしに、「最近数年間、昔話の研究はもとより一切の研究から遠ざかっていたあいだに、昔話の調査研究に若い精力が傾倒せられ厖大な資料が集積された。わたしの『昔話集成』も大幅な改訂を迫られている。このとき、新人をもって組織された研究グループを知る機会をえたので論文を改めて書きたい」。そこで研究会への一つの揶揄かもしれませんが「入社試験のつもりで一文を草した」と書いていらっしゃる。そこはよいのですがただしその先の具体的には十四頁になります。ここのところはちょっと皆さんにお考えいただきたい。「柳田翁の昔話の二分類説が発表されたときは、アアルネの分類に慣れていたわたしにはショックであった。ジィドウの論文は、はじめにも述べたように、柳田論文の発表された前年に発表され云々」これからみると、柳田の本格昔話、及び派生昔話という二つの大きな分け方は『採集手帖』から『名彙』に行くプロセスでもって、関先生は当然ご承知かと思っていたのですが、この文章からみる限り、それは「私にとっては大変なショックだった」っていうことなのです。これからすると柳田と二人の間で昔話研究の最も基本的な分類案については、必ずしもきちんとしたディスカッションはなされていなかったような気がします。そして柳田は柳田の方法で、『名彙』にみられる人の一生をベースに置いた分類でもって、ほぼご自分の考えをここで完結させていらした。ところが一方ではそれに対して、世界的な視野というか、特にA・Tナンバーに基づいて関先生は分類を試みている。そこはいかにも交わっていない部分がある。両者が平行線でずっと走ってきたというようにしか私には考えられない。そういう意味では関先生はやはり、柳田のこの二分類に批判的であると同時に、ジィドウの説と同じようだっていうのでショックであった――と。柳田国男はいつ、いかなる機会にそのような新しい説を手に入れていたのか。そこが知りたくて、後で成城の柳田文庫でジィドウの原文をご自分で読んでみた、ということまで書いておいでです。

関先生にはそのようにしていつも目の前に柳田国男がいらしたわけです。しかし関先生の学位論文である『著作集』の第一集でしたか、あの「日本昔話の社会性に関する研究」を読みますと、柳田のこの人の一生の分類が関先生の考えの中にベースとして入ってきていて日本の昔話の分類、つまり昔話の位置づけを社会性、要は通過

儀礼です。人の一生の通過儀礼と重ね合わせて解こうとしている。これは柳田国男のこの発想、『昔話採集手帖』から『名彙』の分類に至る本格昔話の考え方というのは、関先生にとってはいつもつかず離れずのところにあったのではないか。そのように私は考えるのです。これに関しては小澤さんもやはり関批判をしながら論文をお書きですので……。

小澤　関先生が『昔話集成』で発表されたあの三分類と、柳田の『名彙』の二分類はどういう関係にあるのかということは私も非常に興味を持っています。ある時先生が退院された後、伺ったことがあります。その時関先生はこういうふうに言われたので本当かどうかもし知っていたら教えていただきたいのですが、柳田国男は昭和二十三年に『名彙』を出した、そして『集成』一冊目が出されたのが二十五年ですね。そうすると約二年、そこに間がある。その間に柳田国男が関先生の三分類案に興味を持たれてね、共著にしようと言ってこられたと。

野村　はい。それはたしかに伺いました。

小澤　そうですか、それを自分は断ったと、はっきり言いました。二分類と三分類は本質的に考え方が違うので、一緒にされては困るのでお断りしたと言っていらした。それで私はびっくりしたことがあるのですが、やはりお聞きになりましたか。

野村　私にも繰り返して関先生はそれを強調されました。『日本昔話集成』が出るという時にしかも間際になって、柳田先生ご自身から共著もしくは共編にして欲しいという申し入れがあった。しかし僕はそれを拒否した。それからは柳田先生との仲は決定的になった。相入れないものになった。それで次に『大成』に掛る時にも実はそういう事情があったけれども、そのところはよく理解してから君は一緒に仕事をしてくれ、というふうに釘は一本打たれました。

小澤　関先生の三分類は、よくアアルネ・トムソンの三分類によるというふうに言われるけれど、アアルネが作ったものをトムソンが増補して、今の形に出したのは一九六四年が最初です。昭和二十五年ということは一九五〇年です。ですから『集成』の方が先なのです。だから関先生が見たのは、トムソンが増補する以前の形だということになります。時間的にそうなります。基本的な考え方は同じですけれど。

大林　ちょっと話は前の方に戻りますけど、さっき野村さんの話では柳田国男と二分類か何かということについてディスカッションしていなかったっていうことですね、私は、柳田は自分より年下の者とそういうディスカッションをする人じゃないと思うんですが、どうでしょうかね。ただ柳田はいろんな研究会で若い人がしゃべるのを聞いていて、それを材料にして考えを組み立てるというのはよくあったでしょうけどね。

小澤　柳田案にどこまでかかわっていたかという問題だけども、私は関先生に接している中でいつも強く感じていたのは、言葉の端々に柳田国男が人間の誕生から成長の過程をいうというところに光を当てたために、日本の昔話研究がそちらへばかり目が行ってしまったということをずいぶん言っておられたことです。だから関先生の

努力は三分類という形を作るだけではなくて、そういう柳田昔話観からいかに脱却するかという、そこのところに向けられていたと私は感じていました。

野村　何と言っても柳田国男には『桃太郎の誕生』という一冊がある。一般に言う〝小さ子〟の発見があるわけです。それをどう乗り越えるかですね。

大林　そうすると二分類を乗り越えようという努力のほかに、例えば『桃太郎の誕生』の主題にあたるような、何か特定の昔話の主題ないし話型か何かについて、柳田を乗り越える志向が顕著だった研究っていうのは何か関先生にあるんでしょうかね。

小澤　ないんじゃないですか。

野村　そうですね。おっしゃるのは例えば柳田の〝小さ子〟の発見に該当するようないわば決定的な関敬吾のキーワード、というようなもの。それはないように思われます。

小澤　私は、関先生の気持ちとしては、『桃太郎の誕生』から出発した柳田昔話学に対するアンチテーゼとして最後に『比較研究序説』を提出したように思います。特に後半にある「日本アジア地域の昔話の平行関係」という部分にそれが集約されていると思います。一つの話型についてではなくて、今日の二番目のテーマに関係してくる問題です。

二、国内資料研究と海外との比較

大林　二番目の関先生の口承文芸研究における「国内資料研究と海外との比較」そちらの方に話題を移しましょう。

小澤　関先生が日本の昔話の研究について考えていらしたのは、『桃太郎の誕生』以来の考えからいかに別な研究角度を獲得するかという問題だったと思います。そしてこれが出版されたのは皆さんご存知のように入院の後ですからね、これは奇跡的な大事件だったと思います。入院中、お見舞いに行く度に、先生が「今外国の話と日本の話の平行関係を調べてメモを作っているんだよ」と言っていらっしゃいました。いつもベッドの上に原稿用紙を広げて床にひざまづいて書いていました。だけどそれが纏まる可能性、私はあまり持っていなかった。失礼だけど、そんなに長持ちするとは思わなかった。先生から聞いたのは、日本の昔話全体を、世界の昔話の分布の中に置いてみたらどうなるかということをやってみたいんだということでした。ですから特定の話型についてのアンチテーゼではなくて、そういう方法論を使ってアンチテーゼを出そうとしていらしたと思うのです。

　実際にこれは我々後輩の者にとってはものすごい刺激になります。若い人達がこれの中の例えばどれかの話型を取って、それについてのモノグラフィーを書くという形で比較研究が進むことを、関先生

は願っていらしたんだろうと思うのです。ですから私はここの部分が頁数はそんなに多くないけれども、日本の昔話研究史に関先生が遺されたものすごく大きな遺産だと思うのです。

ただここからはちょっと批判になってしまうのですが、学問のことですからはっきりさせておかなければならないと思うことがあります。我々の学会誌『口承文芸研究』から書評を頼まれた時に訳文と原文とをつき合わせたり番号をつき合わせたりして読んでみたら、間違いが多いのです。それでひとつひとつ訂正して書いたら私の書評がなんと五十七枚になってしまいました。そういう意味では荒っぽいところがあったと思います。入院していてやったのだからしょうがない面もあるし、やっぱり開拓者だから、初めから細かいことをするよりも、とにかくブルトーザーで森林を切り開くみたいな荒っぽい仕事で充分意味があると思います。そういう細かい間違いがあるということを関先生の本を読む時に気をつけなければいけないと思っています。

関先生のもう一つの大きな功績とは、ドイツの昔話研究理論を日本に紹介したことだと思います。最初にはクローンの『民俗学方法論』の翻訳があります。岩波文庫の。それからそのあといろいろな本の中で、ヴェッセルスキーだのフォン・デア・ライエンの説を要訳して紹介していらっしゃる。それがわれわれ後輩の目を開いてくれたという業績は大きいと思います。翻って反省的に言うと、関先生のあとこれだけ民族学ないし口承文芸学のヨーロッパの理論を日本に紹介するという仕事は、細くなってしまっているでしょう。これは我々の責任だと思っています。

ここからまた批判になって申し訳ないのですが、関先生は語学はそんなに出来なかったと思う、私は。クローンの『民俗学方法論』をもちろん関先生にお会いする前に読んでいたけれど、難しい本だなぁと思って、さっぱりわからなかった。ある時期になって原文を手に入れて比較して読んでみたらもう間違いがあちこちにあるのです。だからわからないのです、あの本は。二重否定が二重否定にとってなかったりして。

それからもう一つ、アンティ・アアルネの『昔話の比較研究』。あれは初め未来社が出していた雑誌『民話』に何回か連載されていたのですが、途中で断ち切れになったので本にしようということになったそうです。その段階で私は先生から一回見直してくれと、受け取ったのです。原文と照らし合せたら、これが大変な誤訳の連続でした。最初から全部やり直した方が楽なくらいの原稿でした。徹底的に直して、今の岩崎美術社の本になっています。語学については、時代が違いますからね、今と。ですから私は責める意味で言っているのではない、やはり先駆者としての荒っぽさということは

我々後輩が知って、補っていかなければいけないと思っているんです。

しかしよく読まれましたね。私はそれは感心していますよ。新しい物が出るとすぐ読む。特に今ゲッティンゲンで『エンツィクロペディ・デス・メルヒェンス』という百科事典を出しているのですが、それが分冊で配達されてきます。私がまだ読まないうちにもう読んでいきなり電話かけてきて、「君、あの項目読んだか、どう思うか」なんて言われて、こちらはあわてて「ちょっと待って下さい」と。すごく読んでいらっしゃいましたね。

直江　関さんが外国の研究書をいろいろ読んだというのは、一つには柳田さんの蔵書の中に必要な物がかなり入っていたと思います。それから、私もそう頻繁ではないけれども新宿の紀伊国屋に行くと、あそこで何度もひょっこり関さんと会った記憶があります。だから関さん自身が一人で行っていた回数というのは、聞いてみたことはありませんでしたが、かなりなもんだったと思います。それで、関さんはずいぶん外国の研究状況にも気を配っているんだなぁとその度に私は感心した記憶があります。

小澤　本当によく目を通していらっしゃった。しかも若い人達の論文なんかもよく読んでいたんですね、すごい方だった。

野村　関先生の書かれた物には直接お名前が出てこないのですが、インド文学やインドの神話を研究されていらした田中於莵弥さんが、実は若き日の関先生の有力な情報提供者、もしくはお互いに親しく話をされる仲間でした。私、在外研究でインドに行く前に、関先生の所にご挨拶に行ったところ、「君、むこうに行くのなら田中於莵弥君を尋ねろ」、つまり俺、君の間だと言われるのです。これは案外と知られていないのです。

私、幡ケ谷にある田中さんのお宅に伺いまして直接お目にかかっていろいろお話をうかがったことがあります。関先生が東大の図書館司書をなさっている時に、昼休みになると毎日田中於莵弥さんに会って、インドの話とかインドの説話集、それから外国の資料を、今で言う情報を得ていた。田中さんは関先生と非常に仲が良かった。田中さんは去年お歿くなりになりました。昔話のインド起源説もそれを探るべく田中於莵弥さんにアドバイスを求めていたというのが事実のようです。

大林　関先生の比較研究というと一つはもちろん地域的な比較があるわけですね。だけどそれと同時に私にはやっぱり気になっているのは、神話と昔話の比較という問題です。先生の「八岐の大蛇の系譜と展開」（金関丈夫博士古稀記念会編『日本民族と南方文化』平凡社、一九六八年）という論文がありますね。ヤマタノオロチの神話を関先生は昔話の目でもって見ようとしているんですね。私はやっぱり相当無理じゃないかっていう気がするんです。だけどもそういう昔話の方から他のジャンルを見ようとしたっていうのは、関先生はその他には何かやっているんでしょうか。

小澤　『落窪物語』をやってましたね。

野村　古典の『御伽草子』を中心とする室町時代の物語類を昔話研究の立場から、つまり国内の文献の中でどこまで同じような話型を

たどるのができるかというようなことで、これはある意味では柳田国男の『昔話と文学』というあの著書の方法に路線としては競合してしまうのですが、その試みはかなりなさっていて、角川書店から出ている『室町時代物語大成』とか他に『室町物語集』というのをしきりに読んでいらした。そして私に「これはどうだろうか」とお訊ねになる。

『日本昔話大成』には文献資料を途中でずいぶんお入れになった。つまり、日本の文献では遡って大体どこまで確認することができるかというのがその頃の関先生の関心だったのです。

大林　それは重要な仕事ですね。

野村　ただ一方で新話型。『大成』でいう新話型は、小澤さんがおっしゃったように、大ざっぱというか無理が目立ちました。先生と私とで話をしてこれは話型と認定していいだろうかと。私はだめでしょうと申し上げて、帰ると、翌日、角川にだめだといったのが、もう勝手に認定されていてそのまま送られているのですね。特に『伊曾保』種の話を次から次へと国内の資料を拾われて、それを新話型、新話型と認定する。「先生、新話型ではありません。これは『伊曾保物語』からの移入にすぎない。これは『伊曾保』の受容だというふうにおっしゃったらよいでしょう」と言うのですが、「いや、これは新話型」。例えば、話例が二つ、三つあったらもう新話型に認定してよいのだというわけです。「反対です」っていうと「君は僕の協力者なのにいうことを聞かない」となるわけです。強引なところがあった。

大林　関先生の場合、話型というのはどういう条件を満たしていれば話型なんでしょうかね。

野村　しきりにおっしゃいました。国内で二つか、三つ同じ例が発見されたら新話型と認定してよい。相当荒っぽいのです。

直江　飛び離れた所で最少限度三つは必要でしょうね。

野村　私共は話の定着するプロセスといいますか、そこでの経過をたどろうといつもするのです。先生はそれには案外無頓着です。三つ、四つ報告されているからそれでよいといわれる。

小澤　そのことは外国の昔話との比較の時にも感じられる傾向ですね。ちょっと似ているとこれはもう系統関係があるんじゃないかというふうに考えられる。でも私はそこのところは好意的に先生のことを見ているんですよ。つまり先生の気持ちとしてはこれからの研究のために、若い者に一つのヒントを与えておこうということなんじゃないかな。それを言っておかないと見のがされてしまうかもしれない。言っておけば誰か反論するかもしれないけども、誰かが発展させるかもしれないと、そういう気持ちだったんじゃないかと私は感じています。

大林　さっき野村さんのところで、あんまりプロセスは気にされなかったと言われました。そうすると今非常に盛んになってきている話者論とかそういうのは関先生はあまり関心はお持ちでなかったんでしょうか。

野村　いいえ。語り手論は興味を持っていらしたのです。しかし、ここで申し上げるのはなんですが、先生は実際にはあまりフィール

ドに出て直接話を聞いてはいらっしゃらないのですね。意外だったのは、たとえば先生は遠野にもついに行かずじまいだった。それでどうしても机の上でのカードに基づく作業に終始なされていたわけです。語り手の実感というのはちょっと隔靴掻痒でわかりづらい。それを私共がフィールドに出て聞いてきて、この人はこうこうだと言うと、新鮮な驚きと言いましょうか。新しいニュースが入って来たという具合に受け止められていたわけです。語り手論は提唱されました。しかし、それは理論としての語り手論で、実感はほとんどなかった。

小澤　フィールドワークっていう点では、応接間にかかっていた奄美の語り手がいましたね、あれだけじゃないですか、奄美へ行った。

野村　芳賀日出男さんの写真の。

小澤　今いう意味でのフィールドワークという形ではやっていらっしゃらない。

大林　これは口承文芸ではないけれども若者組とかね、ああいうのには先生はずいぶん興味持っておられましたね。あれはある程度フィールドワークされたんじゃないかなぁ。それでもやっぱり長崎の出身だから自分の若い時の体験でもって……。

直江　というよりも柳田さんの所の木曜会、実際には日曜にやっていたけれども月例会ね、それには関さんは大変よく出て来ていて、そこでのいろいろな知識があるでしょ、今おっしゃるような面についてもね。ご自身でフィールドに出かけられなくても、それをあの会で次々に発表されていたから、その知識が沢山入っていた。

小澤　口承文芸の外国との関係についてですが、これは関先生の大きな功績なので、ぜひ言っておきたいのです。関先生の研究というのは基本的には地理歴史学派だと思います。ただ、ヨーロッパの地理歴史学派のやり方は、ご存知のように共時的に資料を可能な限り集めて直接比較するわけです。そして一方で文献によって通時的に遡るという形でやりますね。この方法は我々日本人にとってはたいへん難しい方法です。言葉の問題があるので。ヨーロッパは地続きで、留学生だってたくさんいるから翻訳も容易だし、今でもできるわけです。一方、私達日本人に何ができるかというと、それが関先生のやり方だと私は思っているんです。つまり先生のやり方というのは、これを見てもわかる通り、各国で出しているカタログを集めるわけです。そしてカタログとカタログの比較をやっていくわけです。こうやればある程度はできるんです。地理歴史学派というその歴史的な文献はわりと使えるけど、現在の資料としてはカタログを使うのですからうんと弱いです。だけども日本人が外国のものをやる時に、ヨーロッパ人と同じような緻密さをもった地理歴史学派的研究というのは、将来はできるようになるかもしれないけれど、今のところきわめて難しい。

　そうすると関先生の考え出したこのカタログによる地理歴史学派的方法というのは、私は一つの発明だと思っているんですよ。それによっていろんなことがやっぱりわかる。もしこういうものが翻訳されてみたら、ヨーロッパ人はものすごくヒントを得ると思いますね。つまりヨーロッパ人からするととても及びもつかないようなと

ころを、先生はカタログによってだけれどもかなり推測していらっしゃる。この功績は大きいと思うんです。

大林　カタログについてもうちょっと具体的に……。

小澤　はい、そうですね。この中にも出て来ますけど、一番もとになっているのがアアルネ・トムソンのカタログです。

直江　例のタイプインデックスね。

小澤　はい、そうです。それからトルコでいうとエーバーハルトとボラタフがあります。それから中国でいうとエーバーハルトがある。最近では丁乃通（ティンナイトン）の『中国昔話話型索引』があります。そういうタイプインデックスによる比較というものを非常に工夫なさった。これは日本という地理的状況を考えると有効なやり方だと思うのです。もちろん荒っぽさはどうしてもつきまといますが。

直江　そのタイプインデックスについて申し上げると、関さんが今の話だと日本の昔話を組み込んでという意図を持っておられたようだけれども、池田弘子さんね、あの人は柳田さんの所の例の木曜会ではしょっちゅう顔を合わせていたわけだけれども、池田さんの方はアメリカに行ってアメリカの大学の学位論文に、日本の昔話をあのタイプインデックスに組み込んだのを学位論文に出したんですよね。それは関さんが考えていたことの先を越しちゃったわけです。それで池田さんのことを言うと大変機嫌が悪くなって。池田さんもとうとうそれで日本に帰って来られなくなっちゃったんじゃないかなと思います。アメリカから後にハワイに行って、そこに落ち着いちゃっています。

野村　柳田国男の百年祭の時にはお見えになりましたね、池田弘子さんは。

小澤　そのことについてはね、私がドイツにいた頃、関先生からぶ厚い手紙をもらったことがあるのです。

直江　関さんから。

小澤　関先生から。それで池田のタイプインデックスは『集成』を無断で使っているので、発行停止にするようF・F・Cとかけあえという手紙でした。F・F・Cの編集長のクルト・ランケ先生とかけあえって言うので、困ってしまいました。

直江　それくらいおこっていたということですね。

小澤　すごくおこっていました。でもクルト・ランケ先生に一応事情は話したんですよ。つまり池田さんはほとんど『集成』ばかり使いながら、事前に断りがなかったという点ではおこることもある程度理解できる、というふうな線でお話しました。しかしクルト・ランケは、学問的に発表したものを学者が使う場合は、どういうふうに使ってもこれは自由なはずだ、という考えで、そのままに終ってしまいました。帰って来て報告したら、関先生はすごく機嫌が悪かったです。

大林　確か『民族学研究』に、関先生が書評を書かれた。確かに池田さんの方もちょっとイージーなところもあると思うんです。『集成』ばかりじゃなくてね、未来社の『日本の民話』のような巻によっては、資料としては相当吟味しなくちゃいけないような本を安易に使っているんですね。

直江　池田さんのはもう一度誰かがきちんとしたものに作り直さなければいけないですね。というのはご存知のように韓国出身の崔仁鶴という人が、何を学位論文として出そうか、と私が相談にのった時に、それじゃ朝鮮半島の昔話をタイプインデックスに組み込む仕事をやりなさいと言って、崔君がそれをきちんとやりました。だから、日本の昔話が整えば、比較のためにも大変良かったわけです。

三、関敬吾の人柄

大林　関先生は、もちろん口承文芸に一番主力を尽くされたわけですけれども、しかし柳田さんの木曜会に出ておられたように、やはり日本の民俗学の中における関先生の位置づけの問題があると思うんです。そしてやっぱりことに柳田さんとは多少離れた、平凡社の『日本民俗学大系』、あれの非常に積極的なメンバーでいらした。そのへん日本の民俗学の中における関先生の位置づけといいますか、役割りを、ちょっと直江さんの方から。

直江　そうですね、柳田さんの所で関さんその他の方とみんなが顔を合わせるのは例の木曜会と言っていたけれども、実際には月に一回日曜日の研究会でしたが、ご承知のように二階が柳田さんの寝室、下が広い部屋があって研究所に使わせてもらっていて、その時は柳田さんがまん中に座ってあとの者が十数名でしたね、柳田さんをとり囲んでレポーターが発表すると、あとみんながいろいろ質問をするというような形でした。関さんはよく出て来てました。そしてよく発言しましたね。柳田さんがおられるということもあって、我々参加している者も何となく遠慮がありました。ところが、関さんはそういう時もズケズケと発表者に対して質問しましたね。あれは偉いというか、やや傍若無人というような感じを受ける時もないことはなかったけどもね。そういう異彩を放ってましたね。大変適切な、ある意味では辛辣な質問など放たれるという印象が強い。よく出て来ておられましたよ。

大林　『日本民俗学大系』ではたとえば大間知篤三さんとかああいう人達とよく一緒に仕事しておられた。

直江　そうですね。我々、私達とか牧田君とか、今野君なんてのは同世代なわけだけれども、関さんはそれよりももうひとつ上で、大間知さんとか大藤さんとか、そういうグループで我々から見ればもう先輩ということで、大変敬意を我々払っておりましたね。その発言などについてもね。

大林　関先生はエスノロジーの学会にも関係していたわけですけれども、その場合なんたってボスは岡正雄さんで、関先生は岡さんに

頭が上がらなかったですね。どうもそういうところありますね。エスノロジーの方は結局関先生はマージナルな存在で、やってらっしゃることは昔話だし、それからまた奄美の調査とかそういうのはされたけども、また学会の理事とか評議員になっておられたこともあると思いますが、若い人に影響力があったというんじゃないですね。

直江　今申し上げたように非常にズケズケとものを言われる方だったから、何となくとっつきにくいという感じを後輩というか特に若い者は持っていたんじゃないでしょうかね。敬意は払ってもちょっと近づき難い。

大林　そうですね。ですから若い学者っていうと結局野口武徳君がね、唯一の弟子じゃないかしら。

野村　関先生ご自身のお人柄、もしくは性格そのものなのでしょうけども、多くの人をうまく纏めていくとか、それから学会のために特にご自分が何々をなさるというよりは、むしろ外野席で客観的に見ていないと事実は見えないのだというお気持ちがいつも強くて、それで自分は脇から、つまりは直江さんのおっしゃる、辛辣な発言をすれば、自分の存在価値はある。それでよいのだというように、割り切ったところを持っていらしたと思うのです。

小澤　そういう意味では柳田国男における木曜会みたいな会は関先生の所ではなかったですね。

野村　ありません。

小澤　私は何しろドイツ文学から昔話の研究に入っていったから、初めのうち誰とも付き合いはないわけです。だから昔話や民俗学の勉強をしている我々同世代の方との勉強会が関先生のもとにあったら、入れてもらえたらいいなぁという気持ちがずっとあったので、いろいろ探りを入れるんだけど何にもないようでした。

野村　一種の人間嫌いかなぁと思われるところがありました。あとでご家族からお聞きするとご長男も次男もそうですけど、家の中では学問の話はほとんどなさらなかったのですね。あれだけ家の中で仕事なさっていらしたのですが。それからどういう人が自分の学問に興味を持っていて、跡を継いでくれるかというようなことも、それもほとんどおっしゃらなかったようです。ご家族は、「うちの父は一体何をやっていたのかわかりません」というようにいわれます。割り切った考えをなさっていた部分があるように思われました。

小澤　いつか沖縄の遠藤庄治さんが、沖縄民話の会で関先生をお呼びしたことがあるんです。私は橋渡しをした関係上、ついて行きました。その時上のお嬢さんが付き添いにいらして、その方から『集成』を作る時にもずいぶん手伝ったんだという話を聞いたことがあります。何かあれでしょ、当時、複写機がなかったから、資料を二つ手に入れて一方はやぶいて並べたということでした。手で写したりするのはお嬢さんの仕事だったと言っていました。

四、関敬吾の遺した課題

野村　大林さん。私がお尋ねすると話はまた戻ってしまうのですが、

先程昔話研究者の目から見た神話研究。一方大林さんの立場から見た関先生の神話に対するアプローチの仕方、これは柳田ははっきりと『桃太郎の誕生』や『昔話と文学』さらには『口承文芸史考』の中で昔話を飛び石づたいにたどっていくと神話に至る。つまりは神話が上位にあって、これの零落したものが伝説。次にまた零落したものが昔話。ついで世間話というように、これらを縦軸に置いて考えていらしたわけです。関先生は必ずしもそうではなくて、神話と昔話は違う原理だということを常に強調されたのですが、その点、大林さんの立場から関先生の昔話からアプローチした神話研究、あるいは神話との関係ですね、これについては今日は司会者の立場ですが、きちんとお話しいただきたいと思うのですが。

大林　もちろん私、柳田国男が考えるように、神話が零落して昔話になると、それは充分あるプロセスだと思うんですね。それは聖なる話が俗的な話になっていくプロセスですね。聖か俗っていうばかりじゃないと思うんですが、それはやっぱりあり得る一つのプロセスだと思いますね。それからまた神話と昔話は全然別な原理であるということも、またある意味では言えると思いますね。しかし他方から言うとこの頃荒木博之さんなんか強調しているように、日本の昔話は単なるエンターテイメントじゃないんだと、何かやっぱりもっと教育的な面もあり、さらにいわば憲章的な、チャーター的な面もあるんだということになると、神話に近くなっちゃうんです。それからまた外国の神話研究者、たとえばカークなどもこういう神話、この部分というのはギリシャ神話ならギリシャ神話、メソポタミアならメソポタミア神話の特定の部分には昔話が入っているんじゃないかと言っている。だから決して私は関係は単純にないと思うんです。まずそのことを言いたい。

ただ私は関先生の研究についてことに何て言うか、ヤマタノオロチの場合ですと、「二人兄弟」型昔話を基準としてみようとするのは、無理だと思います。やっぱり神話としての竜退治というのはずっとあるわけなんでね。まさにそういうものが神話的に語られているところなんですよね。だけど関先生の場合どうしても「二人兄弟」というのになる。それにはランケのちゃんとした大きな研究があるわけですよ。だから古典的なそういう研究があるから、どうしてもそっちの目から見たくなるのはわかるんですけど。

いろいろ関先生のことはまだあると思いますけれども、関先生の蒔かれた種の中で、それはもちろん日本口承文芸学会もその一つですけれども、あんまり注目されていないけれどもこれからもっとこういうのは伸ばしたらどうかと、そういうような何かございましたらば。

小澤　関先生のあまり知られていない仕事に、英語のカタログがあるのです。英語で書いた昔話カタログ『The Types of the Japanese Folktales』。Asian Studies で出したものです。出版当時先生からいただいて、ヨーロッパへ行く時にもそれを持って行ったんです。『集成』の最後にある、「昔話の型」に則ったカタログです。外国人からすると日本の昔話のタイプインデックスというと、池田さんのと関先生のその英語のものとその二つあることになります。それと私はもう一つ、日本とアジアの平行関係について先生がいろいろヒントをくれているのだから、若い研究者がこのうちのどれかをつかまえて、今度は本格的な、もっと資料を集めての比較研究、世界の昔話の分布における日本の昔話というような位置づけの研究が、もっと出て来なくてはいけないと思っているんですよ。これは言葉ができなくてはいけないから大変だけれど、その点を関先生はうんと期待していらしたと思うわけです。

大林　今回の雑誌の論文の方では伊藤清司さんに関先生、中国の昔話との比較という形でもって、関先生の仕事が評価されるようなことを書いていただくつもりです。中国との比較に関しては伊藤さんがかなりされたわけですから。ただそれにしてもアジア東部の中の他の地域の昔話の整理というと、考えてみるとたとえば朝鮮については崔仁鶴さんのインデックスがあり、それからインドネシアに関しては昔のヤン・ドゥ・フリースのがあるくらいですね。大陸の東南アジアの方はほんとに整理されていないんですね。これはほんと誰かがやらなくちゃいけないんじゃないかな。ベトナムなんかはずいぶん沢山ベトナムで資料が出ているらしいんですね。

小澤　関先生はさっきのことに繋げて言うと、ヨーロッパ語で出たアジアのタイプインデックスをよく集めていらっしゃいます。この『比較研究序説』の最後にある「オリエント・アジア・日本の昔話比較対照表（未定稿）、略語及び書名」のところです。トルコはさっきのエーバーハルト・ボラタフ。ユダヤ・オリエントについてはヘダ・ヤーゾン。インドについてはトムソンとウォーレン・ロバーツ。インドネシアのドゥ・フリースのタイプレギスター、これは大きな本です。モンゴルではヴァルター・ヘシィヒの『モンゴルのメルヒェン』など。ずいぶんよく集めていらっしゃる。そのあたりは我々後輩がもうちょっとやらなくてはいけない。

五、関敬吾と関わった人々

大林　関先生は確か戦争中は民族研究所に入りたかったんだけど入れなかったんですね。それで東大図書館をやめてから、民族研究所の外郭団体の民族学協会の方に入ったのだと思います。そして戦争直後はＣＩＥか、あれに勤めていたんですね。あの頃だから関先生とかそれから石田英一郎さんとかああいう人がＣＩＥに勤めていた、そういう時期がありましたね。誠文堂新光社で出した『日本社会民俗辞典』っていうのがありますね。

野村　あれはよい仕事ですね。

大林　関先生はあの辞典の常任編集委員でした。渋沢敬三さんの序文に「最初、英文をもって刊行する予定で、終戦後ただちに企画されたものであったが、諸般の状勢の変化により（中略）日本語版としてまず公刊することに変更された」とあるように、最初はＣＩＥの時の企画ですね。

小澤　関先生は学芸大学では何年くらい教えてたんですかね、結局。

野村　かなり長かったと思います。現在東京都内の中学校や小学校の校長で、定年をそろそろ迎える頃の方は、関先生の講義を社会学か何か。そして私は何人か知っているのですが、面白くない講義だったそうです。これは専ら現場の教員の評です。どうして関先生の所に行って、面白いのですか、などといわれます。黒板に書く字は読めないし、そうでしょうね。

大林　それでも関先生は律義なところがあって、ゲッティンゲンに行く時も前から話があったけれど、学芸大が定年になるまでは行かなかったのだと聞いています。

小澤　関先生あのドイツ行きはものすごくつらかったみたいですね。帰っていらしてこんなに痩せていたでしょ。それからあの病気になってしまって。『落窪』に関する論文をむこうで講義なさったんですよ。むこうでやるからドイツ語に訳してくれと言われて。先生の原稿を全部訳しました。しかし会話はほとんどできなかったようで、苦労されたことと思います。私は一年後に同じゲッティンゲンへ行ったのですが、ドイツ側でも研究所の若い助教授クラスの連中なんかはとても残念がっていました。たまに通訳がいる時なんか話が聞けると、すごくよく知っていると言うんですよ。もっと話を聞きたかったと言っていました。

大林　ちょっとまた話前後しますけども、関先生がこちらの研究に入るような動機といいますか、一番最初、たとえば『昔話採集手帖』を作るにしても柳田さんとどうやって知り合いになったのか、それからまたお母さんから話を聞いていたにしても、それを本に纏めるとこにいくまでにはやはりそれなりの何か動機がなければと思うんですけども。そのへん何かご存知だったらば。

野村　柳田国男との出合いはきちんと記憶されていて、よくおっしゃいました。関先生が図書館に勤めていらしたということがあって、柳田は大変な読書家ですから、よくお越しになった。そして図書館の本の出し入れの時に、柳田が声を掛けて下さって。で、自分の所に来いというのでお伺いしたそうです。図書館で働いていらした時の出合いが直接あったようです。関先生はもともと昔話研究をするつもりはなくて、違うことに興味を持って……。

小澤　ドイツ文学。

野村　ドイツ文学をやりたいというふうに考えていらしたのですね。

小澤　東洋大学でその頃ドイツ文学科があったのかどうか知らないけれど、ドイツ語をなさっている。それで榊木敏というペンネームで論文を書いていらっしゃいます。ドイツ文学の本も持っていらして、ヘッベルとか十九世紀の本をたくさん持っていらして、私も何冊かいただいたことがあります。当時榊木敏の名前で書いた文学の論文も一つか二ついただいたことがある。若い頃はむしろ文学の方

をなさろうとしていたみたいです。そして、図書館で柳田国男と出合って最初に勧められてやったのが『島原半島民話集』ですね。

大林　そうするとあの頃昔話をかなりやっていた人は他にいるんでしょうか。

野村　岩倉市郎。それで岩倉市郎さんと関先生とは、やはり柳田国男が直接関先生に指示をされたそうです。関先生は調査先にいる岩倉市郎さんに手紙を出したり、それからお金を送る役目を果したらしいのです。一方岩倉さんからはどこを探しても話が聞けないという返事などは、直接関先生が聞いていらした。それをまた、こうしろこうしろっていうように、いわば指示を直接与えるのは関先生がなさった。したがって岩倉市郎の昔話研究は、関先生が直接関わっていたようです。

直江　木曜会では私たち、私は今七十二になるけれども、それよりももう一段古い先輩大藤さんとかね、あのグループで、大変ないろんなこと刺激を与えられた先輩でしたね。その先輩たちの中で一番よく発言をする人でね。それも柳田さんに向かって、こんなにぶっきらぼうに話をしていいのかしらと思うくらいズケズケと。一番印象に残っているね。

大林　私達の学会で関先生と非常に親しかった人っていうのはどういう方なんでしょうか。

直江　大間知さんあたりはね、わりといろんなことを話し合っていたみたいですが、それくらいじゃないかな。

野村　エスノロジーでは馬淵さん。ただしご存知でしょうか。一番最後にはけんかしてしまったのですね。馬淵さんのお亡くなりになる一年くらい前。

直江　何が原因なんですか。

野村　馬淵さんから関先生のとこに手紙が来て、関先生も私に「馬淵君とけんかしたから」「どうしたのですか」とお尋ねしたところ、馬淵さんからは「君とは長く付き合ったが、今度のことでは手紙か何かで失礼な内容があるからもう絶交だ」。そしたら関先生も「俺も絶交だ」って。まわりでもって、あの年になって子どもみたいなけんかされていて困るといっていたのです。激しいのですね、お二人とも。

直江　馬淵さんよりは関さんの方が気性は激しかった。

大林　馬淵さんもずいぶん癖のある人でしたね。

直江　癖がありましたね。

小澤　関先生の病気は長かったですね。四年くらい入院していたでしょ、合計で。

野村　それで消灯時間になったあとで、先生は一人だけ廊下に出て、あるいはトイレに書物を持って入ってしまうのですね。つまり病室で読んでいるとまわって来ますから。たいていは廊下の階段の処に踊場がありますね、あそこでいつまでもガウンを着て本を読んでいるので叱られる。もっとも『大成』の仕事をなさっている時ですから、私は三日にあげず行かなければなりません。そうするとまた医者とけんかしたとか、看護婦の口調がどうのこうのとおっしゃっていたのですが。

病院の中では実際に困った患者で、というのは主治医のカルテを横目で見ていて、お前のドイツ語は綴りが間違っている、そこもここも違うと言った。しかもまわりに看護婦がいる前でそれをやったから、主治医が面目を無くして、あの患者は何者だ。それで翌日私が行ったところ、関先生は「ああいうことを言ったから明日あたり追い出されるかもしれない」。「先生いいかげんになさい」って言ったのですが。主治医のカルテをのぞき込んで、間違いを指摘したそうです。関先生らしいですね。

直江　関さんの性格なんでしょうね。何にでもズケズケとものを言うのは。

大林　私は関先生で思い出すのは、冬でも足袋はかなかったですね。あの人そうなんですね。股引ははいているけど足袋はかない。それから関先生じゃないかしら、原稿用紙にまず鉛筆で書いて。

野村　それからボールペンを使うのです。

小澤　読みにくいんだなあ、あれは。

大林　同じ原稿用紙でなぞってね。ああいう原稿の書き方する人は私は他に知らないな。ちょっといないんじゃないかしら。

野村　いやぁすごい原稿ですよ。実は先生が、これ雑誌に載せろっておっしゃったのですが、あまり好ましいとは思いませんと言って私の手元に原稿があるのですけど、判読するのはよほど慣れないと。ですから先程ありましたね、至文堂から出ている『昔話の歴史』。あれはもう誤植だらけで大変ですね。というのは関先生の字は読みきれないのです。

小澤　『日本の昔話・比較研究序説』もそうでしょうね、たぶん。都会でやっているいわゆる現代の語り手達の話も一度聞いてもらおうと思って、笠原政雄さんを東京へ招いた会の時に、関先生もお招きしたんですよ。まず長岡の笠原政雄さんが最初にいくつか語って、それから現代の語り手達が、図書館員だとかお母さんだとかそういう人達が語ったわけね。そしたら関先生びっくりしてね「これは面白い、これは新しい流れだ」なんて言って喜んで下さいました。でも都会で語っている人達にとっては、もう何年も前からの活動なので、先生ご存知なかったんですか、とか言っていましたけどね。とにかく非常に好奇心旺盛な方でしたね。

野村　大林さん、外大のA・Aに遅くまで関先生お付き合い、出席されてましたよね。

大林　そうでしたかね。

小澤　川田さんがやっていた研究会でしょ。そうでしたね。

野村　それから一番最後はおととし、その時は私はいませんでしたが、成城大学で行なわれた昔話懇話会にはお出になっていたはずです。それが最後だった。公の場は最後でした。最後まで〝産神問答〟についての論文を書きたいとおっしゃって、それはもう五年も六年もそうおっしゃっていたんですが、これはついに纏まらなかった。

小澤　それでゲッティンゲンのブレードニヒが書いた『運命の女神』という論文に、先生すごく興味を持っていたんですよ。だけど自分では全部読みきれないもので、何年も前にこういう計画で今、

奈良の竹原威滋君が翻訳していますと言ったらすごく喜ばれてね。楽しみにしていらした。だからブレードニヒの本の翻訳の出版が間に合ってよかったと私は思ったんですよ。

大林　一九六〇年頃でしょうか、民話運動とかってありましたね。ああいうものに対しては関先生はどういう立場だったんでしょうか。全然これは直接はもちろん関係なかったわけですけども。

野村　そうですね、つかず離れずで原稿下さいって言えば下さったようなことを、確か雑誌『民話』には一度ぐらい、一度か二度書いてはいらっしゃると思います。ただご存知のように関先生にとっては〝民話〟という言葉はアキレス腱でした。それというのもこれは岩波新書の『民話』をお出しになった時に、柳田国男はじめまわりの方から痛烈に批判されて、そして孤立してしまったわけです。今さら〝民話〟という言葉を使うのは云々ということで。これが関先生にとっては非常に強い心の傷で、つまりは傷痕としていつまでも残っていた。

そのことについて『著作集』の「昔話の構造」を私が分担したところで、解説を書いて、〝民話〟という言葉云々に触れた。思えば、私は一度だけほめられたわけです。「君は僕の名誉を回復してくれた。これは感謝する」と。生涯に一度だけです。関先生から感謝すると言われたのは。〝民話〟という言葉の誤解を解いたことだけです。そういうことにはいつまでもこだわっておいでした。

それからこの本で柳田国男賞を受けられた時にはちょっと冷やかしたのです。私は「先生、柳田国男賞に決定した時には辞退されるのではないかと思って期待したんですが」って言ったのです。そしたら先生は頬を赤らめながら「でもね君、人からほめられるのはいくつになってもうれしいことだよ」なんておっしゃって逃げられましたけれど。やはりうれしかったのですね。若い人たちは、関先生は拒否されるのではないかな、辞退されるのではないかなと言っていたんです。

小澤　関敬吾先生は賞としては柳田国男賞だけですか、他に何かもらいました？

野村　一つでしょう。

小澤　たぶんそうですね、やっぱりうれしかったでしょうね。

野村　あまりほめられたことはなかったそうです。

小澤　そうかもしれないね。

大林　だいたいこのへんで皆さんの話も出尽きたんじゃないでしょうか。お忙しいところどうもありがとうございました。

（一九九〇年七月二十四日）